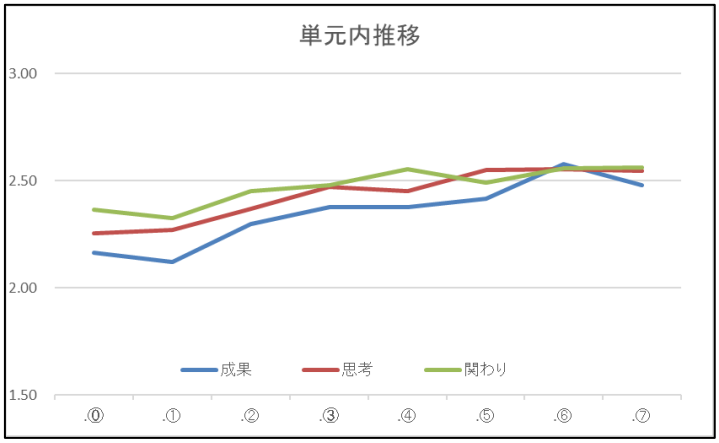
第４学年３組　授業研究　まとめ

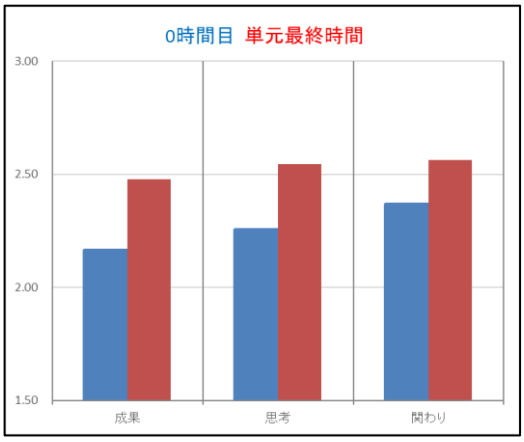
指導者　　橋本　淳一

１　単元名　　後ろにスッ！気持ちよくクルッ！後方支持回転！　　（器械運動・鉄棒運動）

２　児童の変容

（１）情意面　（形成的授業評価をもとにした授業評価から）　男子１３名（6組在籍児童1名）　女子１６名　計２９名





・「成果」は，６時間目の学習が１番高い数値となった。この時間の学習内容は，課題解決や次時の発表会のために，友達とアドバイスし合いながら練習する時間であった。学習の様子は，活発にアドバイスし合う中で練習を積み重ね，「なるほど！」「わかった！」「できた！」という声が多く聞こえた。児童の関わり合いの中で，「わかる」や「できる」を実感できることが，成果に大きく結び付いていることがわかった。

・「思考」は，５時間目の学習以降の数値が高くなっている。この単元の前段では，技能ポイントを見付けるために技の比較を行ったりすることに思考の時間を設けた。中段では，異質グループで自分のめざす姿に向かって課題解決に取り組む時間とした。そして後段では，同じ目指す姿や課題をもつ等質グループで課題解決に取り組む時間とした。目標や課題が近いグループで活動する方が，課題解決の方向性が定まりやすく，選択肢も増えすぎないからこそ思考しやすかったことがうかがえる。

・「関わり」は，成果と同じく６時間目の学習が１番高い数値となった。前述した内容に加えて，等質グループでの課題解決学習は，助言することと自分の課題が直結することが多く，共に活動する中でその内容に深まりや気付きがあることがうかがえる。その実感が，関わり合いの数値として反映されていると推察することができる。

（２）技能面　＜鉄棒運動＞

	①後ろ振り跳び（振りを３回して後ろへ跳ぶ）			②逆上がり（後方に一度回転する）		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	２０	4	5	２１	0	8
単元後	２４	2	3	２１	5	3

	③一の字逆上がり（十二時の位置までに足がそろう逆上がりをする）			④連続逆上がり（リズムよく回る）		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	１２	7	１０	１６	3	１０
単元後	１３	8	9	１７	5	7

	⑤後方支持回転（振りあり）（足の曲げあり）		
	できる	もう少し	できない
単元前	8	5	１６
単元後	１０	7	１２

・実態調査を行ったすべての技で技能の向上を数値として見ることができる。体ならしの運動を毎時間継続して行い，基礎感覚などの技に直結する感覚を養うことができたからだと考えられる。
・全体として技能が向上していたとしてもその変化は決して大きくない。技に取り組む時間をさらに確保していくことも必須であるが，教師側の技への理解をさらに深め，より効果的で取り組みやすいアプローチ方法を児童に提供していくことが重要である。

（3）思考面

問　後方支持回転ができるようになるために，どのような練習や取り組みが必要だと思いますか。（しましたか。）（複数可）			
単元前		単元後	
・足の振りを身に付ける練習。	7	ダンゴムシの練習。	6
・あきらめずに練習。	5	後ろ振り跳びの練習。	4
・逆上がりの練習。	4	ツバメの練習。	4
・体を後ろに倒す練習。	3	お腹を鉄棒にくっつけるための練習。	3
・お腹を鉄棒から放さない練習。	3	補助をしてもらったり，補助具を使ったりする練習。	2
・体の勢いをつける練習。	2	あきらめず何回も取り組んだ。	2
・補助具を使う。	2	足で勢いを付けた。	2
・鉄棒に腹部をかける。	1	逆上がりの練習。	2
・できている人の動きをよく見て真似をする。	1	足の振りで勢いをつけて，頭を後ろに倒した。	1
・手首の返しの練習。	1	足も腕も伸ばして，体に力を入れて回った。	1
・自分の課題に合った練習。	1	体ならしの運動で感覚を身に付けた。	1

・単元の前後で明らかに違うのは，技の習得に向けての取り組みについて，具体的な表現が多くなったことが挙げられる。これは，技のポイントを把握した上で，どのような取り組みや感覚が必要かを的確に捉えて活動していたことがうかがえる。単元の前段で技能ポイントに基づいて自分の課題を把握するとともに，課題解決に向けたフローチャートから必要な取り組みを選択できるようにしたことが，このような結果につながったのではないかと考える。
・技の習得に向けて，スモールステップ表を用いてめざす姿を設定したり，課題解決につながるフローチャートを提示したりしたことが児童の思考の一助になったと推察される。さらに充実させていくことで技能向上に向けた児童の取り組みはさらに活発になっていくと考える。

3　成果と課題

中学年のめざす姿
自分の課題を見付けたり，課題解決に取り組む内容を選んだりする中で，知識や考えたこと，気付いたことを伝え合うことができる児童

【成果】
・タブレット端末を活用して自分の動きを動画として残していくことで，自分と他者との比較が可能になり，学習を積み重ねていく中での自分の変容に気付くことができた。
・児童同士のアドバイスをより効果的なものにするために，自分の課題や見てほしい視点を焦点化して相手に伝えることができるような学習カードを活用した。見る視点が定まったことで，内容や伝えたいことを明確にかつ端的に伝えることができ，その場で課題点を修正する活動につながったと考える。
・連続図や自分の姿の映像，スモールステップ表やフローチャートといったツールが複数あったことで，めざす姿や課題点を見付けやすく，その後の取り組みをどうしていくのか見通しをもつことにつなげることができた。

【課題】
・後方支持回転の習得が不十分なままの児童が多く見られる。技能習得に向けた練習時間の確保がさらに必要であった。
・思考し知識として理解した内容を，感覚として養う時間の確保が必要であった。そのためにも児童同士での正しく安全な補助の習得ができるように指導していく。
・場やスモールステップ，フローチャートの内容をさらに充実させることができれば，児童の課題解決に向けた思考や意欲を高めることができ，より技能向上につなげることができたと考える。